

# 変容するガーナの農村コミュニティと人々

## —私の現地調査奮闘記—

# Changing Rural Communities and People in Ghana:

## A Story of My Struggle in the Field Survey

名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程 近藤 菜月

KONDO Natsuki

(Graduate School of International Development Studies, Nagoya University)

キーワード：ガーナ

### はじめに

本レポートは、2015年8月から12月にかけて約5ヵ月間、ガーナで行った調査にもとづいている。この調査は、国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)のグローバル人材育成プログラム(Global Leadership Training Program in Africa, 以下GLTP)による支援を受けて実現した。現地ではUniversity for Development Studies(以下、UDS)のデビッド・ミラー先生より指導を受け、アッパーイースト州のボルガタンガ、ボンゴ両地区を拠点として調査を実施した。

私の場合、調査は当初の計画とは全く違った方向へと進んでいった。プログラムに応募した当初、私はミラー先生が文献の中で扱っていた「内発的発展」の議論に関心を持っていたが、テーマが抽象的であったため、調査計画の練り直しからスタートするという事態となった。そして5ヵ月後には、農村部コミュニティにおける青年グループの活動という、渡航前には全く想定していなかったトピックに行きついていた(GLTP最終報告<sup>1</sup>参照)。とはいえ、当初のものに関わり無いように見えるこのテーマも、もともとの関心から出発して先生方と議論を重ねつつ、フィールドでの聞き取りを通して、徐々に形成されていった過程と切り離すことはできない。私の場合、当初の計画にこだわり過ぎることなく、目の前の人々や新しい発見に焦らずじっくり向き合うことで、最終的には博士課程の研究の軸となるようなテーマを見つけ出すことができたと思う。本レポートではその試行錯誤の経験を共有し、これから留学あるいは海外での調査に向かおうとする方々が、たとえ多少予定と異なったとしても充実した体験ができるよう、ささやかなエールを送りたい。

## UDS とミラー先生

私にとって GLTP 最大の魅力は、留学先大学の教員から個別に指導を受けられる点にあった。私は修士論文で UDS の教育理念やカリキュラムについての研究を行っており、その際にミラー先生の論文に出会った。留学先の UDS はガーナで唯一、北部農村部にたてられた国公立の大学である。植民地支配下に間接統治がとられた歴史的経緯から、南部より開発が遅れている北部の発展に直接寄与することを目指して、1992年に設立された。2008年、このUDSにガーナで初めての「内発的発展」(Endogenous Development)のコースが設置されたが、ミラー先生はその立役者であった。「内発的発展」は西欧的近代化を目指す発展モデルに対し、文化的基盤をより重視する発展のあり方として理解されるが、私はこの概念がガーナのコンテキストでどのような意味を持つのかということに興味があった。ミラー先生は「内発的発展」をガーナのコミュニティ開発の理念として広めようとしてきた第一人者であり、GLTPへの参加は、そのミラー先生から直接の指導を受けるチャンスであった。またそれまでわずか2週間しかガーナに滞在した経験のなかった私は、ガーナの農村社会に詳しいミラー先生の指導の下、5ヵ月という比較的長い調査期間を使って、博士課程の3年間をかけてとりくむテーマをじっくり練り直したいと考えていた。

## テーマ再設定からのスタート

2015年の留学当時、ミラー先生は正式にはUDSを退官されていて、ボルガタンガにご自身が建てた Millar Open University(以下、MOU)(写真.1)を拠点にされていた。そのため、このMOUのキャンパスが私の主な滞在先となった。明るい緑色が印象的な建物の2階の1室が私の部屋であった。

到着したその日のうちに、ミラー先生と5ヵ月間の計画について話しあった。プログラム応募時の私の関心はガーナにおいて「内発的発展」が置かれている文脈を、この概念を掲げるNGOの活動や研究プロジェクトの内実から把握することにあっただが、ミラー先生との面談の結果、このテーマはいったん脇に置き、現地の実情を踏まえてより具体的な研究テーマを設定し直すことになった。最初の1、2ヵ月を研究テーマ再設定(①)の期間とし、それをもとにフィールド調査を実施し(②)、そ

写真.1 MOUのキャンパス



の成果に基づいて、博士論文の研究テーマのプロポーザルを執筆し、発表する(③)という3段階の計画が立てられた。最初の2ヵ月間は、ガーナの農村開発や文化に関連した文献を読み進める傍ら、MOU

で行われる様々な講義を聴講したり、MOU が関わる NGO のコミュニティプロジェクトに同行したりしながら(写真.2)、研究テーマを練った。下の表は5ヵ月間の活動の流れである。

表 5ヵ月間の活動の流れ

8月	テーマの再設定と発表
9月	(文献学習、講義聴講、NGOの活動への同行、先生方とのディスカッション)
10月	クンクアでのフィールドワーク
11月	フィールドワーク、文献調査など
12月	プロポーザル執筆、最終発表

写真.2 NGO CECIK のメンバーと



### ミラー先生との議論に着想を得て、フィールドワーク開始！

最初の2ヵ月間、特に私がもともと関心を持っていた「内発的発展」という概念の内容について先生と議論を重ねた経験が、その後の私の調査の方向性に強く影響したと思う。ミラー先生自身はオランダへの留学中に「内発的発展」のコンセプトに出会ったが、先生のこの概念の解釈には、当時の彼の指導教員であった社会学者ノーマン・ロングの影響が見られる。ロングが農村開発の研究に用いた“Actor-Oriented Approach”は、あらゆる個人は皆「自らの行為に対する他者の反応を観察し、不確定に変化する状況を確認しながら、自分の周りに起こる様々な社会的出来事や活動の動きを常に観察し、そこにどのように介入するかを学び、問題を解決しようと試みる」、「社会的行為者(social actor)」であると規定し、社会的なプロセスをその中に生きる諸個人の相互作用から捉えようとするものだった<sup>2</sup>。ミラー先生はこのアプローチにもとづき、修士・博士課程の研究を通してガーナ農村地域の人々の知識の創造・蓄積・伝達の創造システムを研究し、農村部の人々は伝統的な習慣の為に変化をあまり取り入れないと結論づける既存の研究に反して、人々が多様なネットワークを通じてコミュニティ内外から新しい知識を取り入れるダイナミックな学びのプロセスを持つことを明らかにした<sup>3</sup>。こうした調査の経験が、「内発的発展」とは個々のアクターの相互作用過程とその結果としての社会変容であり、人々の日常生活のなかでつねに起こりつつあるものである、と捉えるミラー先生の考え方に繋がっていた。

社会の変容過程を、そこに生きる一人一人の「行為者」の相互作用によってもたらされる結果と関連づけて把握しようとする見方は、私にとって示唆的であった。私は、あるコミュニティで人々のライフストーリーを収集し、コミュニティ全体の歴史とそこに生きる一人一人の個人史との接点を探ることで、鍵となる時期や要因、出来事を導き出すことができるのではと考えた。そして9月末、クン

クアという、ミラー先生がNGOの活動などで関わりをもっていたコミュニティを対象とした調査計画を発表した。発表には、ミラー先生をはじめとするMOUの先生方や学生、ガーナ北部で活動するいくつかのNGOのスタッフなど色々な立場の方が参加し、フィールドでの調査に向けて様々なアドバイスを下さった。

### 電気も水道もない村での新鮮な日々

10月から、クンクアでのフィールドワークを開始した。クンクアはボルガタンガ地区と隣のボンゴ地区のちょうど境に位置するコミュニティで、キャンパスからバイクで30分以上かかる僻地にあった。ヴィアダムという名のダムによってできた湖のほとりにあり、耐えがたい暑さの日でも時折さわやかな風が吹く、美しい村である。私はミラー先生に紹介していただいたある家族の家に約1ヵ月お世話になった(写真.3)。

村の家はほとんどが泥でつくられている。大体3家族程度が一つの家に暮らす、家族ごとの空間は壁で仕切られている。伝統的な作りでは屋根は茅葺屋根だが、より「近代的」な部屋は屋根が金属板に取り換えられている。家族は私を金属板の屋根が渡してある部屋に寝かせてくれたが、雨が降ると、金属板の屋根は雨漏りの心配がない代わりに、ものすごい音がした。滞在中は1回約

写真.3 滞在した家の周りの風景



2時間のインタビューを1日2人くらいのペースでほぼ毎日実施した。電気がないので、日が昇ると同時に一日が始まり、日の入りとともに一日が終わる。夜が早いので一日が早く感じられるうえ、食事の支度に時間がかかるので、一日2回もインタビューをして、夕飯の支度を手伝っていると、あっという間に一日が終わった。食事はティーゼットという、ミレット(ガーナ北部の主要作物である穀物)の粉を湯で練って、

写真.4 ティーゼット



アマニ(小魚)やオクラを入れたスープと一緒に食べるものをほぼ毎日食べた(写真.4)。町で食べるティーゼットは精製した真っ白の粉を使うが、村で食べるティーゼットは赤色や灰色で粒が荒い。私は村でしか食べられないこのティーゼットが好きで、毎日食べても全く飽きなかった。インタビュー以外の時間は水汲みや畑仕事をさせてもらおうと思ったが、水を一杯ためた桶を頭の上に担いで井戸から家まで運ぶのは至難の業だったし、鍬を握ればあっという間に手の皮がめくれ上がり、私はてんで役立たずだった。調査中は頼りがいある村の友人に何度も助けられた。キャンパスと村とを行き

来するようになったある日、道の途中でICレコーダーやフィールドノート、財布などがすべて入った鞆を落としたことがあった。村からキャンパスはずいぶん距離があるし、どこに落としたかもわからない。絶対に見つかりっこないと思って絶望していると、いつの間にかいなくなっていた友人が、どこかの村で拾われて保管されていたのを探し出してきて「このあたりのことは俺がよく知っているから、皆に聞いて回れば必ず情報が出てくると思ったよ」と鞆を差し出した。その強力な情報網と人々のつながりには感動した。鞆の中身はほぼすべて無事だったが、おやつバナナだけがなくなっていたのには笑ってしまった。

### 青年グループの台頭と革命期の草の根運動

クンクアでは、住民たちの自主的なボランティア労働によって、学校や図書館の建設、植林や夜間学校の開催などがされてきたが、そうした活動は1980年頃から活発になったとのことだった。私は、ライフストーリーの聞き取りによって、コミュニティの歴史を人々の視点から再構築し、なぜそのような変化が起こったのか、それは人々のどのような意識変容と関わっていたかについての洞察を得ることを目的とした。

調査から、1980年にクンクア出身の青年が南の都市部での就労から戻り、若い人々を集めて小さなボランティアグループを結成し、コミュニティ全体でのパーティなどのイベント企画や、農業における相互援助などの活動を始めていたことがわかった（写真.5）。

写真.5 青年グループ

また、当時のメンバーに対する聞き取りから、その背景には当時ガーナ北部で少しずつ広がり始めた学校教育や教会の影響があったこともわかった。伝統的規範や世界観について、村の若者が大人達とは異なる視点で考えるようになったことが、青年グループの結成に繋がっていた。



特に彼らの活動は、1980年12月31日にジェリー・ローリングスに率いられて

起こった革命運動が追い風となってより活発になっていった。ローリングスによる革命政権は社会主義的な思想に基づき、“Grass-root Democracy”の理念を掲げて全国に民衆から成る組織の枠組みを整え、それが村を内側から変革することを目指していた若い人々を後押しした。クンクアでも革命以降、コミュニティと外部とを繋ぐ窓口として青年グループがその存在感を増し、先に述べた植林や学校建設といった様々なプロジェクトにコミュニティの人々を動員した。

先行研究を調べてみると、こうした動きは当時ガーナ北部の農村部全体で起こっていたことが分かった。カローラ・レンズ(1995)は、1970年代中頃から北部ガーナやその他の地域において「発展の為の団結」をスローガンとしたボランティアグループが数多く結成されていたこと、またこうした青年グループの自助精神とローリングスによる革命政権の「草の根の民主主義」の理念とは非常に親和性が高かったことから、革命政権がその存在を奨励していたことを指摘している<sup>4</sup>。革命政権が枠組みとして設けた様々な民衆組織と結びつくことで、外からは見えづらかった彼らの存在は可視化・正当化され、自ら環境に働きかけて変化をもたらす力が獲得された。こうしてこの時期、農村部のあらゆるコミュニティで数多くの学校や病院、ダムや井戸などの建設が村の人々の協働作業によって進められた。

クンクアでの調査から浮かび上がった歴史的ストーリーは、革命の到来以前から存在した潜在的な「変革の芽」が、革命期に強力な草の根運動へと発展する過程に私の関心を導いていった。急激に社会が変化する中で、自己と社会を見つめ直しながら生きた個々人のストーリーには、ガーナの人々のしなやかな逞しさが凝縮されているように感じられた。

私は帰国前にフィールドでの発見と先行研究とをまとめ、UDSのタマレキャンパスにて将来の研究計画を発表した。発表にはUDSの先生方が多く参加し、アカデミックなアドバイスから文化的な事柄に至るまで、沢山の有意義なコメントをして下さった。フィールド調査から得られた発見をもとに練った研究テーマに対してガーナの大学の教員の方々に興味を持ってもらえたことは、私にとって大きな励みとなった。

### GLTP プログラムをふりかえって

私のように、調査中にテーマを設定し直すという例は、GLTPの参加者の中でも珍しいのではないかなと思う。採択時のテーマに対して支援を受けているわけであるから、内容がずれていくことに対して後ろめたい気持ちがあり、かなりの不安を抱えながら調査を進めていたことが思い出される。しかし今振り返ってみれば、博士課程の1年目という時期に、フィールドとの対話の中から長い期間をかけてテーマをつくりあげていった経験が、その後の研究にしっかりした土台を与えてくれていると感じる。そのように現地で臨機応変に対応していくことができたのは、GLTPの柔軟な支援があったからこそでもある。計画の大幅な変更にもかかわらず、励ましの声をかけて下さったスタッフの方々には本当に感謝している。

またGLTPでは帰国後に報告書を執筆することになっているが、この報告書に対しても研究員の方から、英語の表現から全体の構成に至るまで非常に丁寧な指導を受け、とても勉強になった。GLTP研究成果報告会では、他のアフリカ諸国に留学していた学生の方々の文理様々な研究成果に触れて刺激を受けるとともに、スタッフや研究員の方々からコメントを頂き、励みになった。このような機会を頂

いたことに対して成果をもって返すことができるよう、今後も研究に励んでいきたい。

---

<sup>1</sup> 自身の GLTP 最終報告書 URL:

<https://i.unu.edu/media/ias.unu.edu-en/news/15180/GLTP-2015-Final-Report-Ms.-Natsuki-KONDO.pdf>

<sup>2</sup> Norman Long (1989) Encounters at the interface: a perspective on social discontinuities in rural development. Sociologische studies 27, Wageningen Agricultural University, The Netherlands, 221-245.

<sup>3</sup> David Millar (1992) Understanding Rural People's knowledge and its implication for intervention: 'From the Roots to The Branches' Case studies from Northern Ghana. MSc thesis. Agricultural University, Wageningen.

<sup>4</sup> Carola Lentz (1995). Unity for Development' Youth Associations in North-Western Ghana. Africa 65 (3), 395-429.

\* 本記事については、本マガジン『留学交流』2016年1月号にも下記の関連記事が掲載されていますので、ご参照ください。

#### 【論考】

「アフリカにおけるグローバル人材育成事業」-国連大学による能力開発へのアプローチ-

国連大学サステナビリティ高等研究所プログラム・アソシエイト 今井 夏子

[http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/12/201601imainatsuko.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/_icsFiles/afieldfile/2016/01/12/201601imainatsuko.pdf)